

Title	佐藤一郎先生、村松暁子様、渋谷誉一郎君.....三氏を偲んで
Sub Title	For the memories of the Three : our teacher Dr. Sato, Mrs. Muramatsu, and our friend Mr. Shibuya
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.5 (2021.) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20210331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐藤一郎先生、村松暁子様、渋谷誉一郎君……三氏を偲んで

関根 謙

二〇二〇年はとても長く感じる一年だった。新型コロナウイルス感染拡大に伴う社会の激変があり、中国語圏の世界では人の尊厳に関わる大きな動揺が広がっていた。そうした経験の記憶が強烈だったからかもしれないが、一月と二月に相次いだ葬儀がもう何年も前のことのように感じられる。しかし今こうして私たちから離れていかれた方々のことを偲んでいると、不思議なことに、今度はこの一年の騒乱が嘘のように閉じられ、さまざまな思い出が一気に膨らんでくる。

村松暁先生夫人暁子様が一月四日に、渋谷誉一郎君が一月六日に、そして佐藤一郎先生が二月八日にご逝去された。慶應義塾中国文学会のみなさんに深いゆかりのあるこの御三方のご冥福を祈りつつ、この場を借りて、私の思い出を綴らせていただきたい。

* * *

佐藤一郎先生は私の直接の指導教授で、学問研究の道筋を照らし出してくださった方だ。日吉の学部一年生だった頃の中国語の授業を鮮明に覚えている。佐藤先生は私のクラスの女子学生を「**小姐」と呼んだのだが、そういう呼び方をする教授は先生しかいなかった。そして講義の時に、先生はずいぶん長い時間黙ってしまふことがあった。あの微妙な沈黙、時には「えっ？」と思うほど長く感じることもあり、同級生たちは逆にすごく緊張して先生の話に

集中することになるのだった。先生はご自分の文人的世界を逍遙しながら授業をなさっていたのだと思う。

後年、院に進むと先生はほとんど一対一の授業で、梁啓超と譚嗣同について時間をかけてとても丁寧に精読を進められた。先生の該博な知識を理解するのは大変なことだったが、この時に読み込んだ『清代學術概論』や『仁学』が私の基礎を築くうえでどれだけ有効だったか計り知れない。また先生は現代文学研究をテーマに据えた私のために、魯迅研究の泰斗檜山久雄先生を招いて講座を開いてくださった。それはいかにも慶應中文らしい細やかな気配りだった。檜山先生の授業は夕刻の五限目に設定されており、終了するとはほとんど毎回、待つておられた佐藤先生が檜山先生と私を伴って、三田や沿線の駅のどこかで飲むことになった。こういう時はいつも佐藤先生の奢りだったと思う。お二人の闊達なやりとりを傍でお聞きできるのは実にわくわくする体験で、授業だけではわかり得ない本質的なもの、文学研究の覚悟のようなことを身近に感じる得難い機会だった。私はこういう場に同席できる光榮に酔っていた。

院が修了する前に、私は埼玉県で公立高校の教師となることを決めていた。そういうある日、先生に誘われて田町駅前の飲み屋街で飲んだことがあった。私はてっきり先生が私の就職について何かお話しされるのかと思っていたのだが、先生は私が梁啓超について書いた修論に触れながら、中国現代文学研究の問題点を次々に挙げてこれからの課題を熱心に語られるのだった。そして最後に、静かに悟すように、今現在の文学の流れを追っているだけの中国学者になってはいけない、清代の學術から中国古典の學芸に立ち返り、伝統と革新の文学を深めるべきだろうと話された。私のような浅学非才なものに対して、しかも地方公務員となって今後研究から遠ざかってしまうだろうという学生に対して、これからなすべき研究の方向性を先生は熱っぽく説かれたのだ。私は先生の文学研究への情熱に身の引き締まる思いがした。

思えば、佐藤先生は二十代の頃に情熱に燃えて同人誌『北斗』の創刊に参加したことがあり、現代文学の領域では曹禺の戯曲の翻訳も刊行されているのだが、民国初年から次第に遡って桐城派古文の研究などをはじめとする文章論の探究に邁進してこられた。博士号を取られた『中国文章論』はその精緻な論考で先生の研究の到達点を示す浩瀚な業績である。その後も『江南の士大夫文学』など数篇の名著を公刊され、中国文学研究に大きな貢献を続けてこられた。あの日私に語られたことは、まさに先生ご自身の文学研究の姿勢だった。その時々職業がなんであるかなど関

係なく、文学研究は生涯をかけて修めるべき道だ。文を志すとは、そういう道を歩んでいくことなのだ。人生の豊かに充実した時間は、その過程にこそ存在している。佐藤先生のあの孤高の姿は、ともすれば安逸に流れがちな私たちをいつまでも励ましてくれるだろう。

佐藤一郎先生、享年九十二歳。

* * *

村松暎先生の奥様、暎子さんは私たちにとってまさしく「お母さん」的な存在だった。私は学生結婚という離れ業をやってしまったのだが、仲人をお願いした暎先生と暎子奥様はとても快く引き受けてくださり、かなり支離滅裂な結婚式を和やかで意義深いものにしていただいた。爾来奥様はとても気にかけてくださり、子供たちまで随分とお世話になった。と言っても、これは私だけではなく、暎先生の弟子たちの多くが預かることのできた幸せである。毎年お正月に先生のお宅に集まって、皆でご馳走になり心ゆくまでお酒をいただいたのが、昨日のように思い出される。常に私たちを褒めて、励ましてくださった奥様は、家族、とりわけ妻たちにも多くの助言を惜しまずになさっていて、彼女らにとっても大きな心の支えになっていたに違いない。慶應で働く者として、学問の道に進んだ者として、またその家族として、どう身を処していくべきなのか、奥様は自らその範を示してくださっていた。

先生のお宅のことで忘れられないのは、なんと言っても麻雀である。当時よく集まっていたのは、新谷雅樹、八木章好、渋谷誉一郎、それに私たち夫婦といった面々で、打ち始めると夜遅くまで続くのが恒例だった。暎先生からいただいた麻雀のお誘いの葉書を、私は今でも書斎の壁に貼ってある。勝負では、先生のたった一枚の牌にかける奇跡的な打ち方に対し、奥様がかなり策士ぶりを発揮していた。思い通りの牌が手に入ると、先生も奥様も「絶！」と高い声を上げられるのだが、その度に、私たちはビクツとなった。村松邸の麻雀卓には、かつては法学部の山田辰雄先生や経済学部の永戸多喜雄先生など錚々たる打ち手が集まっていたという。奥様から伺うそういう方々の武勇伝は実に興味深かった。

思えば、奥様の切り盛りされた村松家の居間は、私たち後進の者にとって研究者・教育者としての生き方を学ぶ私塾だったのかもしれない。

私は院修了後、埼玉で教員を十年間務め、その後立間祥介先生の紹介で西安外国語学院の専家となった。天安門事件の起きる一九八九年を挟む二年間である。この西安で奥様との忘れられない思い出がある。天安門事件の少し前のことだ。奥様から、何かの旅行団の一員として西安に立ち寄ることになったというお手紙をいただき、ついでに私に西安を案内してほしいとのことだった。折悪しくその日、妻は先約の旅行があつて、子供たちを連れて青海省に行つており、私一人で奥様のお泊まりの西安人民大廈に出かけることになった。奥様をホテルにお迎えに上がった時、何よりも驚いたのは、奥様が日本からわざわざ五キロの米の袋を持ってきたことだった。奥様は「関根くんのところはお子様がいるから、きつと日本の米が懐かしいだろうと思つてね」と仰つた。当時の中国の米事情をご存知の方には説明の必要もないが、ご飯を食べるといふ当たり前のことが、中国ではなかなか大変だった。私はこんなに重たい贈り物を運んできてくれたことに心から感激していた。まさに奥様の人柄が凝縮したようなお米だったのだ。

奥様は当時とても活力に満ちており、西安を案内するつもりで私より先に、道をすたすた歩かれていた。そうして道路横断をしなければならなかった時のことだ。あの当時の中国の都市交通事情、これも皆さんよくご承知のように、バスもトラックも乗用車も、そしてバイクも自転車も、猛々しい勢いで行き来しており、歩行者のことなど一顧だにしないのが普通で、気の弱い日本人などまさに命懸けの横断だった。私はいつも以上に警戒心を高めて、渡るタイミングを見定めていたのだが、なんと、奥様が私の手をさつと取り、「関根くん、今よ、ついてらっしゃい！」と叫んだのだ。次の瞬間、私たちは見事に車の波をくぐり抜け、向こう側に渡っていた。

村松暎先生とお二人で過ごされてきた長い年月、先生の大きな業績の背後にはいつも奥様の力強い支えがあったに違いない。そしてこれまでの数十年にわたる中文の歩みも、奥様に見守られ、支えられてきたのだ。何かにつけ導いてくださったっていた奥様の声は、いつも私たちに響いていたように思う。心からの感謝を捧げたい。

村松暎子様、享年八十八歳。大晦日が誕生日の奥様は、お嬢様御一家とともに米寿のお祝いをなさったばかりだったという。

* * *

渋谷誉一郎君は私より七つ年下だが、慶應に入職したのは五年も早い先輩である。学部在学中はすれ違いでまったく知らなかったものの、私が中国西安から日本に戻ってからは、一気に深いお付き合いをするようになり、家族ぐるみで楽しい思い出を重ねてきた。こうしてまだ還暦を越えたばかりだった彼について、古稀を迎える私が追悼の言葉を綴るといふ逆転は本当に胸が傷む。ここでは、彼を呼び慣れた「渋谷」と書かせていただくことにしたい。

渋谷の専門は中国民間講唱文芸、とりわけ敦煌変文などの研究だったが、その博識と好奇心は広く中国文芸の世界を縦横に渉獵していた。彼の友人がどの領域にもかなりいたことは、ある意味、当然だった。そういう彼との忘れられない思い出が私には三つある。一つ目は敦煌旅行である。それは私が、帰国後しばらくして務めることになった北陸大学から慶應に移って間もない頃で、ちょうど北京留学中だった彼に連れていつてもらったのだ。専門家である渋谷にとって莫高窟はまさに自分の庭のようなもので、見学の許された窟の一つ一つを詳細な解説をしながら案内してくれた。彼の解説が莫高窟のガイドたちよりもずっと詳しく深いのは当然だったが、何よりも熱の入りが全く違って、居合わせた日本人グループの人たちなども明らかに渋谷に耳を傾けていた。莫高窟は保護のために見られる窟が限られていたのだが、閉ざされた扉の前に立っていかにも残念そうに、その中に何があるのか縷々語る、彼のあの口調が懐かしく思い出される。この旅行では上海留学中だった私の娘も途中から合流しており、三人で眺めた砂丘の澄み切った濃紺の夜空、そして中天に浮かぶ明るい月の美しさが目に焼き付いている。月牙泉で駱駝に乗った時も、砂嵐のように激しい風の中を歩いた時も、敦煌のことならなんでも任せてくれと言った渋谷の頼もしい姿が、私たちの前にあった。彼と敦煌を旅できたことは、私の思い出の中で輝いている。

二つ目の思い出は、村松先生のお声がけで新潮社から刊行した現代小説の翻訳シリーズで一緒に奮闘したことだ。渋谷のほか、新谷雅樹、杉野元子の両君に僕が加わった四人でそれぞれ作家を一人ずつ担当し、計四冊を出すことになった。私たちは村松先生を囲んでほぼ月一回のペースで翻訳の検討会を開き、毎回相当濃厚な討議を重ねて翻訳文を推敲していたのだ。新潮社の三浦半島にある宿舎で合宿検討会まで開いたのだから、かなりの意気込みだった

ことがよくわかるだろう。このシリーズで渋谷は、農民や庶民を描けばピカイチと言われた梁曉声の作品を選んで刊行された渋谷訳『秋の葬送』を読み返してみると、ユーモアとペーソスに少しばかり色っぽい表現も交えた彼独特の軽妙洒脱な筆致に、今もなお相変わらず、どんどん引き込まれてしまう。この作品はもちろん原作者梁曉声の卓越した筆力があるに違いないのだが、日本語として新たな創作世界を表現するには、翻訳者の知性と日本語の感性が問われてくる。渋谷の文章はそういう厳しさに十分応えるものだった。だが私はそれ以上に、この翻訳の底流には、彼の民間講唱文芸の研究を支えてきた学識と、辺境や周縁に息づく民衆の文芸に対する深い共感があったと思う。彼の学問研究の源泉から迸る力が、翻訳の文章を突き動かしていたのだ。

三つ目は、渋谷との最後の旅となった温州取材旅行である。あれは二〇〇七年十二月クリスマスの頃のことだった。中国トロツキストの研究で温州に住む老人たちを訪ねたいという長堀祐造さんと温州キリスト教会の調査をテーマにしていた私が、民間芸能のフィールドワークで江南を歩き尽くしていた渋谷を引っ張り出して、調査旅行を仕組んだのだ。トロツキストの老人がプロテスト系キリスト教会の長老を説得して、日本人の取材に協力してもらうという、思えばかなり奇妙な計画だったが、権力から睨まれてもそれぞれの主義や信仰を守ろうという強い意志の持ち主という点では共通しており、民間文芸探求の達人が案内してくれるということになれば、かなりいいチームができていたと言える。結果的にはとても大きな収穫があり、いろいろ楽しい出来事もあったのだが、今振り返ってみると、渋谷の病気の兆候はこの時すでに現れていた。出発時にパスポートを店に忘れたり、待ち合わせの時間や場所がわからなくなったり……こういうことは彼らしいおらかな性格のせいだと全く気にもしていなかった。しかし彼がその都度見せた切なそうな表情に、もっと注意を払うべきだったのかもしれない。

その後、二〇一〇年から私は文学部長を務めることになった。そして学部長としての最初の大きな人事案件が渋谷の休職から退職への歩みを見つめることだった。これまで渋谷は文学部の学習指導主任として自己推薦入試の基本的システムの構築や、学生指導体制の合理化に実に大きな貢献をされてきていた。彼とともに奮闘してきた松浦良充さんが現学部長であることを考えれば、渋谷の足跡ははっきり現執行部に続いていると言えよう。

退職するとき、私は渋谷がさぞ無念なのではないかと思っていたが、彼は学部や中文の一員としてなすべきことが

できなくなっている自身の存在を自覚し、一刻も早く職を辞したいと望んでいたのだ。実に渋谷らしい潔さに、私は深く打たれた。その後の長い療養生活については夫人の裕子さんがそのブログに温かい文章で書き綴ってこられた。家族に見守られながら過ごす、穏やかな日々だったと思う。渋谷が息をひきとったすぐ後に、私は妻と病院に駆けつけた。あらゆる管が身体から外されて平安に満ちた彼の顔は、今にもあのこぼれるような笑みが浮かびそうだった。渋谷は今、東京タワーの真下にある寺で樹木葬によって埋葬されている。東京タワーの竣工した一九五八年は同い年の渋谷夫妻の生まれた年、そして言うまでもなく、そこは彼が情熱を注いだ三田キャンパスのすぐ近くである。

渋谷誉一郎君、享年六十二歳。

二〇二二年一月二十二日